

桜

平成29年4月第2週放送

桜は古くより、多くの詩歌に詠まれてきました。『万葉集』や『古今和歌集』『新古今和歌集』にはじまり現代に至るまで、西行や芭蕉などの歌人や俳人によってさまざまな名歌・名句がつけられました。

満開の桜の絢爛さは、見る者を夢のような心持ちに誘いますが、むしろ私たち日本人は、桜の散るさまに、強く心をひきつけられるのではないのでしょうか。

枝を離れ、散りゆく桜の花びらが、さまざまな別れや死を連想させるからなのでしょう。儚く、さながら雪のように静かに散る桜は、すべてのものは変わりゆくという無常の思いを呼び起こします。

「散る桜 残る桜も 散る桜」

良寛の作と言われる句です。先に散る桜を見送る枝に残った桜の花も、やがて散る桜なのだという、深い無常観を伝えます。

すべてのものは変わりゆくものだとは頭では分かっているとしても、自分は例外であると、無意識のうちに思ってしまうのは、私たちの常でありましょう。自分だけでも枝に残るものだと思ってしまうのです。しかし、先の句は、私たちに事実を突きつけます。「残る桜も 散る桜」であると。

お釈迦さまは、この事実を深く観た方でした。若き日に、老人、病人、死者の姿をそれぞれ目にした時、自分とは関係のない存在だと切り捨てることもできたのに、お釈迦さまはそうしませんでした。やがて自分自身もそのように変化していくのだということを、しっかりと認識したのです。

そうであるからこそ、私たちは、今この、一瞬一瞬を大切に生きなければならず、そのように生きた時、すべての存在が美しく感じられるということを示したのもお釈迦さまでした。

最晩年、ヴェーサーリーという町を去る時、もう再び訪れることができないことを予感しながらお釈迦さまは、目に映る風景のひとつひとつを愛おしむように見つめた場面を、仏典は伝えています。お釈迦さまが、“今・ここ”という一瞬一瞬を大切に生きていたからこそ、すべてが美しく感じられたのでしょうか。

桜もそのいのちのかぎりに咲いています。そんな桜の木を見上げる私たちは、はたしてひとときひとときを大切に生きているのでしょうか。

大正・昭和期の作家、岡本かの子の歌は、私たちに、ひとつの覚悟をせまっている

『禅のこころ-曹洞宗-』

かのようにです。

「桜ばな いのち^{いっ}ぱいに 咲くからに 生命^{いのち}をかけて わが^{なが}眺めたり」

今年も、桜の花が咲き匂い、そして静かに散っていきます。

— 終 —